

# かも 市史だより

平成14年3月

No.5

◆編集発行 加茂市幸町2丁目3番5号 加茂市教育委員会市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

## ■ 神像彫刻の発見 ■



▲ 男神像



▲ 猿



▲ 女神像

加茂市は仏像・仏画など文化財の宝庫です。平成十一年以来、市内全寺社の悉皆調査を続けてきましたが、今年度、県内では珍しい神像彫刻を発見できました。

写真は下高柳の日吉神社の神像三体です。男神像（像高四七cm）と女神像（同二八cm）は室町時代後期で十六世紀の作品です。この他、猿（三〇・五cm）もありますが、時代はやや下がりそうです。豊臣秀吉の日吉丸伝説でも知られるように、猿は日吉神の使い、今でも比叡山延暦寺の東麓にある日吉山王神社では猿が見られます。

ちなみに、日吉神社の字名は山王原。近くには曹洞宗の善興寺がありますが、この寺は天正九年（一五八二）、天台宗から改宗したという伝えがあります。また、上高柳には、やはり元は天台宗だった本都寺（真言宗）があります。すると、今は天台宗の寺院はないものの、日吉神社の存在自体、かつて天台寺院があったことを示すことになります。

下高柳の日吉神社が勧請されたのは、鎌倉時代の寛元二年（一一四四）と伝えます。文献史料のない間隙の中で、この神像は中世加茂の精神風土を物語る貴重な文化財なのです。

（文化財部会 川村知行）

# ムラに太閤さんの 家来がやってきた

豊臣秀吉の天下統一によつて戦国の世も終りを告げましたが、加茂附近のムラびとが統一政権の力を知つたのは、秀吉の家臣たちによる検地によつてでした。

「太閤さん」と親しみをこめて呼ばれていた豊臣秀吉の家来が加茂附近のムラへやってきました。文禄四年（一五九三）のことで、耕地・屋敷地などの面積・生産力や耕作者を調べる検地のためでした。秀吉の検地は、太閤検地とい

われています。

天正十一年（一五八三）、織田信長の後継者の座をめぐる賤ヶ岳の戦に勝利をおさめたあと、秀吉は家臣を派遣して、統一的な基準による検地を各地で実施していきました。

現加茂地域の太閤検地は、



▲(写真上) 文禄四年上条村検地帳より  
(写真下) 上条村検地帳末尾部分 増田長盛の家臣で検地役人を勤めた中山太郎右衛門の名がみえる。



おい、今度の検地は、大がかりだな。

豊臣政権の政策実務を担当する増田長盛が検地の総指揮をし、長盛の家臣が三班に分れて検地が実施されました。

検地の結果を書きあげた検地帳は、「賀茂村」「上条村」「下条村」「猿毛村・神明村」「上条之内えみやう村・つふらこ村・せはくち村・あきふさ村・こつなき村」の五冊が残っています。

検地帳を見てみましょう。第一段は所付と四級区分による田畑の等級、第二段は縦横の長さ、第三段は一反三百歩による面積、第四段は生産高、第五段は耕作者を記しています。末尾には、田畑屋敷の等級別合計面積、生産高、検地年月日、検地役人の氏名・花押（かおう）が記され、最後に総紙数を

一反当りの公定収穫高は、上田が一石三斗、上畑が一石で、中・下田・下々田畑は、それぞれ二斗ずつ下り、屋敷は一石です。

これまで越後を支配して来た上杉氏は三六〇歩を一反としてきました。ですが、この太閤検地では、三百歩を一反としているので、換算しただけでも帳簿上は面積が二割増になります。新開発地も記載されたでしょう。

この加茂附近の検地に先立つ文禄三年に行われた会津の蒲生氏領の検地で、二割五分もの生産高の増加が記載されているのに、翌四年五月、秀吉は「上方の検地でも五割や三割の生産力の増加が出ている。会津は遠国だから、それ以前の検地は緩やかにやるようにと命じられていたから、今回の検地で、かなりの生産力の増加が出ると思っていた



なんでも、地域によってばらばらだった面積のはかり方を統一するそうだ。

のに「此出来もすくなく候」と不満を述べていました。

二割五分位の生産力の増加では不満だ、という秀吉の意を受けての加茂附近の検地だったので、比較する材料はありませんが、かなり厳しい検地が行われただろうことは容易に想像できるでしょう。

この時期、越後は上杉氏の領地でした。それなのに、秀吉がどうして上杉領の生産高の増加をはかるのに躍起となつたのでしょうか。秀吉が各大名に課す軍役や城などの普請役は、大名領の生産高を基準にして課すので、検地による生産高が多くなれば、それだけ大名に課す軍役や普請役も増すことができるようになるから、豊臣政権のためでもあつたのです。

上杉氏ではこれまで「菟」という単位や納入する税額である「貫」で土地の広さを表示してきましたが、田は勿論のこと、畑・屋敷地の生産物までも米に換算して表示する石高制を採るようになりまし

た。土地と税制度上の一大変革です。帳簿上、面積が増えれば、その分当然貢租も増えるわけなので、農民たちは、この検地のなりゆきをじつと見守っていました。

(考古・古代・中世部会 金子達)



別

特

# 大正期の文化活動

生涯学習の掛け声盛んな最近ですが、今を遡ること八十年前既に雄大な構想と高邁な理想を掲げ、市井の啓発に努めた団体がありました。□マン香る加茂文化の顛末記。

大正十年（一九二二）八月十七日から十九日の三日間、加茂町教育会、日新俱樂部、加茂町婦人会、青年会の共催で「精神講義講習会」という夏期講座が南舎（南小学校）で行われました。

会場に研修会の文化活動である文化人の講演と懇談会シリーズが開始されました。

講師は曹洞宗（現駒沢）大学の忽滑谷快天学長、聴衆は四百名の盛会でした。

これは土台になって、大正十一年七月二十二日に「加茂研修会」が会員九十名（市川長助、石田友吉、丘山堅、二階堂鶏助、大谷昇一、田下政治、川口精吾、永井栄松、乙川文龍、小池堅磐、長澤勇吉、阿部精悟、皆川新藏、皆川正藏、早田正雄、小野塚伝次郎など。会長は西村大串、会費月額一円）で発足し、発会式には旧制新潟高等学校八田三喜校長が「何の為の知識か」という演題で記念講演を行いました。七月に加茂織物同業組合が事務所を新築し、階上に二百名以上収容できる会議室ができたので、それ

会には午後六時半～八時半に開かれ、講師は次の人々などでした。高島平三郎（東京高師教授）、下村宏（法学博士）、滝精一（文学博士）、野上俊夫（同）、鳥山喜一（新潟高校教授）、黒田亮（同）、関泰介（同）、江部鵬村、相馬御風、石丸梧平、河崎顕了（浄土真宗講師）、関口保（県社会課長）、浅見隆平（弁護士）、新井石禅（曹洞宗管長）、西村大串（加茂朝学校長）、内田周平（国学院教授）、工藤得安（医学博士）。

十一月七月から十三年五月まで二年間にわたったこの活動は、当時としてはレベルが高すぎたりして次第に出席者の足も鈍りましたが、大正の加茂町社会教育活動を代表するものとして大きな足跡を残しました。（加茂暁星高等学校校長 西村香積）

稿

寄

## 探しています

◇ 宮寄上の石動神社には幕末に七十枚余の天井画が奉納されています。うち一枚に「古川栄栄藤原国儀」と署名がありますが、この人物の経歴等が皆目わかりません。どなたか何かご存じありませんか。



▲石動神社の天井画

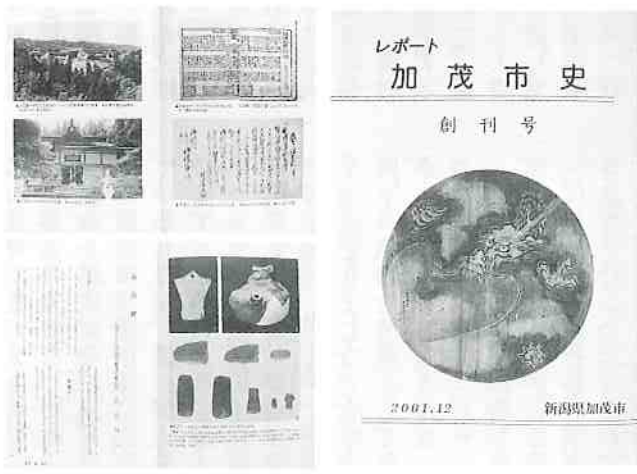
◇ 戦時中日本は百万戸送出計画を打ち出すなど満洲移民を推奨しましたが、加茂周辺でも青海郷開拓団が組織されるなど少なからぬ方々が渡満されました。そうした諸先輩の大陸でのご苦勞を偲ばせる資料がどこかに眠っていませんか。



▶移民募集のポスター（群馬県発行のもの、新潟県立歴史民俗博物館蔵）

## 「レポート加茂市史」好評発売中

調査の成果報告を兼ねて「レポート加茂市史」創刊号が発刊されました。市役所関係機関にて1冊1,000円で販売中です。ぜひお求めください。



## 市史編さんに参加しませんか？

市史編さん室では、市民のみならずから体験記を募集します。戦時下の様子や戦後の窮乏生活、水害・雪害の苦勞談など、あなたの生の体験をお寄せください。

詳しくは市史編さん室までお電話を！

## ◆お詫びと訂正◆

市史だより第四号のページ目に「漆漆書院主人」と掲載しましたが、正しくは「滾滾書院主人」でした。関係者にご迷惑をおかけいたしました。訂正しお詫び申し上げます。

## 編集後記

今号でお知らせのとおり、加茂市史の機関誌である「レポート加茂市史」を発刊できました。加茂の魅力満載な一冊が出来上がったと自負しています。当「市史だより」ともどもご愛読いただければ幸いです。